

歴博をあるく

展示物に見る飲み水の世界

広報部会

水は人間が生きるためには欠かせない重要なものであり、地上のあらゆるところに存在し、飲み水は比較的容易に手に入るであろう。時代劇を見ていて、土間に置いてある桶から柄杓で水をすくって飲んでいる光景を見ることがあるが、何処からどのようにして家の桶まで運んだのか、煮沸したのか、など色々疑問が湧いてくる。飲み水とは今でこそ水道水が一般的ではあるが、その他に井戸水、河川水、湖沼水、雨水などがあり、古より色々な水源を利用してきたと思うが、その入手手段や、利用方法などを展示物から年代を追って見てみたい。

先史・古代（第1展示室）

古代文明は水源の近くで発達してきたのは、人間の存在にとって水が欠かせないことを人々は本能的に知っていたのだろう。一方で、すべての水が飲めるわけではないことにも、気づいていたのではないだろうか。定住地を探す際は、清潔で体に良い新鮮な水が手に入る土地を選んだと思われる。縄文時代の集落跡、三内丸山遺跡のジオラマからは川の水を汲み上げる様子や川で作業する様子を見ることが出来る。



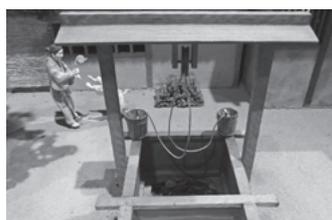
三内丸山遺跡 復元模型
国立歴史民俗博物館蔵

中世（第2展示室）

洛中洛外図屏風（歴博甲本）の描写の中には、共同井戸や竿釣瓶などがあるし、戦国末期の京都の町並みの町家のジオラマには多くの投げ釣瓶が展示されている。平安京の東側には鴨川、西側には桂川が流れており、そのいずれにもかなりの水量があり、流れも早



洛中洛外図屏風（歴博甲本）
左隻第四扇
国立歴史民俗博物館蔵

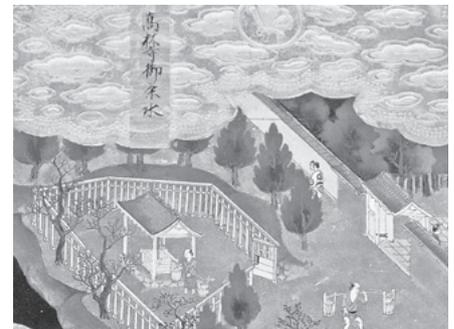


戦国末期の京都の町並み
復元模型
国立歴史民俗博物館蔵

かったので、京内の人口が増えても水源と下水放流の場という2つの役目を果たすことができたのだろう。急流では、仮にゴミを捨てても目の前からすぐに消えていってしまうため、諺で「三尺流れば水清し」と言われるように、飲み水を得ると同時に、川をゴミ捨て場（下水）のようにも利用していたと思われる。

近世（第3展示室）

江戸図屏風の中にも井戸が描かれており、高林寺御茶水の共同井戸から投げ釣瓶で水を汲み、桶に入れて天秤棒で担いで運ぶ様子が鮮明に描かれている。



江戸図屏風 右隻第六扇
国立歴史民俗博物館蔵

三代将軍家光が高林寺に立ち寄ってお茶から「お茶の水」と言われるようになったとの伝承があるとのことで、純良な地下水

があったと思われる。四季農耕図屏風の冬の家の仕事としても井戸が撥ね釣瓶と共に描かれており、飲み水のみならず農作業にも欠かすことが出来なかったことが見てとれる。

古代から近世まで展示室を見てきたが、生活の場での飲み水を得るための井戸は数々見ることが出来たが、その水源はどの様にして探し出し、どの様にして井戸を掘り、どの様にして飲み水として利用したのかなど、疑問点の解消には至らなかった。歴博の研究活動で、令和3年度も共同研究の基幹研究として「水と人間の日本列島史」を継続研究されており、その成果について展示室で見ることを楽しみにしている。

参考文献：

橋本淳司「おいしい水きれいな水」日本実業出版社
イアンミラー「水の歴史」原書房
「万有百科大辞典」小学館